

2022. 6. 12. 主日礼拝説教
聖書： マルコによる福音書 14 章 3～9 節
『無駄遣い』

誰でも「無駄遣い」の記憶というものがあるかと思います。あえて思い出と言わないのは、思い返す度に心にチクッと痛みを伴うような苦々しさのあるやはり記憶なのでしょう。

さて、本日の聖書の箇所は 14 章です。まず 1～2 節で祭司長や律法学者たちによってイエスを捕らえて殺す計略が記されます。マルコは冒頭でそう記すことでこの 14 章全体に異様な緊張感の漲りを露わに致します。

その 14 章で最初に置かれるのがこの「ベタニアで香油を注がれる」という記事です。実はこの伝承の最古のものは 3 節から 6 節までのものでしかありませんでした。マルコによって 7 節以下が書き加えられてここに置かれたのです。

物語は「イエスがベタニアでらい病の人シモンの家において」と書き始められます。当時、人々が遵守していた律法のうちレビ記 13 章 46 節によりますと、らい病(ハンセン病)の人はそうでない人と一緒に生活することは許されませんでした。もし見つかったら本人はもとより匿っていた家族も厳しい罰を受けねばならなかったといえます。感染を恐れて患者は皆、城壁の外にある小屋に移され、そこで治療を施されるわけでもなく、ただ弱って死を待つだけの扱いしか与えられませんでした。もちろん家族が見舞うことさえ許されませんでした。

ただし、その頃の「らい病」というのは疥癬病も含めて重い皮膚病の総称でしたので、このシモンがハンセン病であったとは考えにくいと思われます。いずれにいたしましても、マルコの時代の初代教会が誰と共に生きようとしていたのかが良く理解出来る記事の一つです。

ここに一人の名もない女性が登場します。後に優先的に名を付けるヨハネはマリア(12:3)と命名しています。もう一つ、伝承に名前が欠如しているのは女性であるからという理由でしょう。当時、ラビの間で始まり、クムランの人々にも見られる女性蔑視の広まりがこの古い伝承にも影響を及ぼしています。しかし、マルコの関心事は名前ではなくまさに行為そのものなのです。そして、そ

の行為をイエスが称賛されたという記事を通して女性蔑視を初代教会が引き継がないことを明言するのです。

ナルドの香油をイエスに注ぐというこの女性の行為は破綻した行為だったのかも知れません。三百デナリオンといえば肉体労働の300日分です。何人かは無駄使いだと非難します。律法では貧しい人々への配慮を非常に重視していたからです。しかし、イエスだけが「するままに―」「良いことを―」とその行為をそのまま受け入れるのです。

イエス、つまり福音の前では伝統的な道徳や敬虔さも決定的な判断基準になり得ないのです。イエスのゆえに宗教的・倫理的な価値が徹底的に相対化されてゆくことが、マルコのイエス理解なのです。

7節以下では貧しい人々の永続的存在「いつも」とイエスの一時的存在「いつも～いるわけではない」が対比されます。つまり、この女性の無駄遣いはイエスの存在そのもののゆえではなく、イエスの存在が時間的に限定されているがゆえに記念として正当化されたのです。私たちも無駄遣いの多い人生を歩む者です。しかし、十字架と復活という一回性の出会いを通して、許されて在ることをおぼえたく願います。